



中村俊定文庫
文庫 18
411
2



芙蓉文集目錄

卷之下

君菜の序
俳諧禁札
牡丹の贊
蒲風解
瓢中

芙蓉



駿陽雪瓜園耳得撰

東都雪中庵藝太校



嵐雪
左来
汗六
夷登
盈行

三

木かくま

うけと香

偶作

松のあらし

澹山

雷堂

耳得

葵太



若菜の序

祖翁一回
忌之集也

嵐雪



ふゆふや義仲寺の旅寐多ふや十月十二日夜の
かこうをふたつハ眼こころまを余情とて筆に
残きつ紙今たるんれおとひ出まをなむ
これこそ暖おふ秋のいろくびー乃喜れ耳ふ
心まうけり行まふ終まふからしーの法くーんそ
白く主りー世心の苗神門人且道いうあら
是能諧の主人公

俳諧禁札

去來

表の白席の席二の折破名残の折蓋あり
初折二の折位二乃折を札きて名跡の折を
し〜〜と中へ〜是百負の法あり今時れ
盲佛初折よちやけさつをひ名残の折ふ
お〜〜と中へ〜位阿の事〜云出〜判紙
ふふ〜長短の点と川俣〜一盲最盲と川や
〜ら〜ん

牡丹の贊

許六

牡丹ハ花の富もかり物〜て富も成人の好ぬハ
三人のいささハ志ふ〜と〜世のため人の為
富も〜ハ釈迦〜心経鬼〜擗鼻禪〜て
晨朝〜を念〜行ふ〜子路〜妻れ
〜の〜やの〜成〜百の最漢の夜と〜
三千〜が〜物〜け〜類回〜りは合〜ん不義
富且貴於我如浮雲と〜る孔子なら〜れ〜
ちやう〜富も〜る人ハお世の榮と〜を〜

145/11

①

いとやうい激風ハ蝶ニ冷却きうまてと詩ニをらへ
し女の姿志ろくそめようとうひ花乃香致し
巻をりけんともるやかましくおろしはり跡情を秘ま
句ニ暮るそ紫たうくして夢と儿下こころるる

瓢中

盈行

猿ノ小叢と体たれハ伊賀越ノ断腸の初めひと
やうらんあつとそるんと幻術おらにやうやうれん
瓢中居るやうくは河の大さ斗みかすはきともは所お

あやの房は来してろこれかこの章あつとを
そ中におうじ様は言とろもるそのうは蝶と
化しそ子とかりむ月とやうけをあたうそ
りまえさ月と新酒の白ひも奇あり鳴呼は体
名取と都卒おやううしむ方とも豈初よらんや
そ瓢をれ愛水菜法居るも体りそひめそ守れ
書書皆は中こそよる初そ惟光の扇と夕歌乃
黄昏も空也のるらんそよひの曉もすんて
け蔓とそらうそりやう乾坤宇宙と這見は
瓢中の吐くは呼そのなり

瓢中吟

弘法のひさし物もはくくく
 ころあし乃油跡あはり十二秋
 水尾本も教その出来て子考
 名月や花と見まうふ言もや
 寂ら江の子乃く沈む雲花
 待百念出本もきん厚本紅
 夕きらや蠅のひまより推り
 冬うまや花金の門をまり
 牛東

^{左武} 技玉子
 婆心子
 葵太
 暖枝
 物雲
 如雷
 鬼守
 牛東

阿ららしい風吹雪や降り
 青浦もまもく松葉うね
 海棠やま標ももあんと守
 角力もあなちらもあり秋
 日乃師の師走もねふ不
 二寸もあ介も秋も
 さらし井や空並り
 長さ見れ空へまう川雲
 抱籠やまくく透る思
 狸
 三楚
 這平
 班象
 潼山
 六賈
 琴馬
 蘭厨
 麻介
 龍浮

出定く園よりさひい〜金糸月 茶来
 悠勤く大工の并ふ歌見りか 秀稿
 少なきらや中と踊るいとせやま 波光
 離乃花や常もくふみやこより 少言
 じ〜りや里上貸秋のあさ〜あ 路高 甲及
 四々〜〜泊る客あり夕子の月 六波 カツナ
 志く新くや新く綿木の小築垣 可風 大津
 夏中禁足の傍くまろ
 月清〜〜ふ雲あれま〜りま 露房 出羽
 穂〜出てハ穂も袴や田圃の日、 風草

妻面や喜う降とハおもりま〜人丸 東武
 淡雪や降くら〜〜もま〜の松 吐月
 吹ま〜は淡路へ〜志くま〜 雪奴
 鶏卵や絞る〜ハ〜れ水 機石
 出〜りや〜の意乃松ありま 南冠
 流〜くも又〜り 教行〜ま 枝貞
 朝〜く乃〜初あり 榴若〜お 跡菊 女
 あ〜さ〜傘か〜〜も〜形 求光
 出〜りや〜と湯〜井戸〜 嵐亭
 お〜め〜も風の信る柳〜風枝 ス〜

教かけて世々旅りや箱の虫 尾城 紀来
 行ふまゝと鳴きとや蝶乃壳 兔文
 夏とるや折る〜り地獄賣 女 菊布
 蓮池やけさ出現の存ひし川、露菊
 移つらむや善ふふ時多れ吉 馬走
 復たぬまぬくもや〜銀子のよ志 周竹
 破きても懐忍をぬる世然う子 奥 呑溟
 曉の周とならぬの月んくれ 出羽 和遊
 雲風と詠る日あり 友者とな 志江 竹裏
 綿ぬり〜やくもあやころも久 丹波 杜高

摘草や跡と拙と跡ぬ瓜とつま 柳法
 乙多の阿らむ修ぬや系柳 少女 梅中
 き〜ぬ〜と世と静外是十之夜 戸塚 為好
 炭や〜水煙のり下や蕎麦の虫 偽長 野橋

高申居へ贈

ち世紙忌やた〜災〜子影もや〜 枝玉子
 初唐や下も世〜る徒〜か〜 心紙
 行書の杖〜み〜き阿加さう船 班象
 名月や量の跡〜あ〜さあり 這平
 あ〜月の国やほ〜のか〜を書 白期

美談下

ふくぬ月もおそひ出しては露葉小 羅
 名月や欠るめめとくおもくし家 ^{ナヨ} 鳥申
 尺出し人とす人とあそりきぬが 八亀
 獨善く妙と志信面の物舟か 南空

全

玉あるとよみこくろし色代 婆心子
 湯後うく花火なるわり川屋敷 枝出子
 うくひま紙一日すく茶漬くくれ 楚水
 りえとろか古口やあまのくま 乙児
 散花の旭すのほろ小船代 前返

日出く夜光定る精川く如 櫛石
 推の紫く燈阿まてや露阿西 南苑
 麦播く腰とけたるぬ踊り子 枝貞
 枯るく糸く風阿る跡中火 嵐腹
 茶のく子やゆぬ成居りの乾く阿 葵旦
 飛つまぐ物子やう如た懐くま 白牛
 乳糸と水くさらまくと翡翠汁 ^{スレ} 盈行
 川せうや尾く葉くへくりけり 耳得
 志く菊や深くくさる中く咲 竹工
 かさひくや物く神のそのたす 氷壺

雇まゝの口くく房くぬかしく船女扇歌
 くの香や先きの葉に並くる
 其くくんと忘くくかゆり柳代
 標り留るまきくせて房紫く乳
 水よりくハ留るくくくまの蝸牛
 葉葉くく尻阿きくくくくく
 水くくくくくくくく柳 歌
 内くくく水汗やま乃りて指く房
 窓食くくくくくくくくくく
 なるに日と経くくくくくく
 機石
 扇歌
 蚊洛
 株太
 風堂
 井奥
 桂山
 盤中
 眠象
 南苑
 機石

其くくくくくく香と徳くくくく接續バ
 又全
 名日やい菊まくく白さみやくとり
 吾奴
 一本くく守と持本やせまのあえ
 柳又
 苗くくくくや世の葉ままかくくく
 如雷
 近くくくくくくく摘くくく蒸菜くく
 葵太

蒜の歌 始言 芭蕉

当地あゆ人附白りけく江井中少人
 其くくくくくく味類在依くくく
 粒くくくくくくくくくくくくくく
 下くくくくくくくくくくくくく

東武二ひろめて、魚のほ柄ははな

其附白

蒜の蘇一考をひろめて

考乃右白花の蘇屋とよめをひろ

二月上院

本目録

えせ紙

其返書

蘇標紙見或人の附白も、丈の寸定せし、依く魚
評く、後之に依り予程考く、後不り、依り及
返之をト陸ら下友を比立、京之、古業一校お求ト

は切、京中定る人、云うた、依く、丈の内、と、教を
何く、御宇の、撰集、考、考、丈、定、と、依、ひ、り、と
は、あ、く、せ、て、下、は、花、洛、と、ひ、ろ、め、て、魚、の、ほ、柄、は、は、な

其古業

菜菔集

卷七

春 俳諧歌

蒜のまうさ、と、考、の、右、を、依、め、依、り、て

考、れ、右、の、蘇、の、蘇、屋、乃、輕、を、よ、め

本、と、よ、め、考、を、考、く、考、を、よ、め

二月下院

本目

芭蕉集

手巻下

孫英の記

杭瀬河の瀬より下りて舟に乗りて下りてきたり次々の白れ
 譯感とてあはれに戸を亂す人ありては御りたり
 彼翁の心と係りて為るよの交えりて曰わたり人
 二あるをないりてありてをてあてりいりてを
 鳴りて野棠もききたりてをてあてり志越る奈の土と
 一ありてはとてと子星と隔て自惚非教りては
 還てと直直にたる人となてとて御り簡
 引てとてため書字をてりてはとて一毫の遠
 五のたててりては

自談之詞

んせは

古往遠人花と標とをりて日意とてなるとせり
 坊とて考と考と附て一物別とて附て南所
 未来の作然と此句は細とて古往今来未来
 一白乃格いつまの付り秋風来て道直の意とて
 破まんとの一白一生是乃とてなると書りて
 鼻きりてとて是乃肩のたてて取たりては
 やりては

布袋之遊

胤腹

かの君が代にうまき行ふんといふといふけり
 ありの中にも徳子の家琴琴書画詩歌連俳
 さらばいともゆちくあり交こひとをれ遊客あり
 いいのこころはまや江戸の出現す只世中と扱ふ
 遊人とおとふらむを腹便こころ雲客とよむ
 秋子のこころ強人も又うやまふのみ父のまゝ
 うれしうもあろひかぢうよもあろぬ若人
 床にた寝子大星おとふ人とあろひ茶人の床に

能くひをいひて深きあり何れ月を指さして
 ゆり事よき或時と子供集りてあつても
 高きは精ひ花にハ祢ちりあけさよを記に
 何とひくてもむ事やたこひひの久裏あを唯外
 起活りのよふ世の人を裏中とて何物なる
 事成るるひなははらく乞ふおろふ酒始む
 ちまハ待行あもろハから守慾氣をけま
 合流のたろひあるゆ一敷れ九けきハ飲の長き
 睡ひなる一平とをれを連飲の寂もろから守
 象とま紙志れり森最若象有情遊情と何れ

宇宙の口とひ川くさるる能諧ふくろちるる色一
おとくハ芳跡初漱之遊人と例ハ大囊汝うらりけて
此の歳と人むさもまひひさるらく行るる一
影と人く阿の人と名とさうゆりといふ予ひさる
若て曰成と大徳名ハ陽喬能名藝太まき空摩
居士とも号守則家師之世吾中居なりうはら
とら如月白溜居士末武通博坊の定下之叙也

其引

初書やう一也紙不と林藤くも子才
高れりやう一形く春ハ山ひと川 求光

由後一くりやうと川大和川 芦一
跡ハ花の一字乃くりて初く礼 英明

後引

影とも此降きてゆく花中ハ 女 跡菊
ゆく妻や志まらた花のあらハ山 樞鏡
之度橋上

何とやら謎かけり反此蜀土 鳥醉
出記ませぬ初不音乃りくう船 大津 文素
うくひすの細工栄あり之是山 下経 眠江
奈えく又一きのむれ晒り礼、秋来

阿彌社歌

稻は下と宙と碎くや阿彌の山 京文下
こからーや京と矢背くく小原 上佐 山紫

陽田川ふて

阿彌をこれ日や今も後れ如き 歌中 麻父

穴山梅雪城蹟

菜乃ここの掃雪あり麦の中 スニ 耳埒
里と出く又湖へ戻りやおこし水 嵐紋

小田原より

賢馬牽閑はひくやふの月 信史

葺くや下戸をぬくも男山 牛东

西り谷より

夏陰やうろこ心ふと水虫音 菊古
から清乃晴く陰出す雲うれ 吾奴

久能山

葵うく朝日夕日や久能の海 葵太
岩橋と魚のこゝれやきふれ月 令沙子

贈風鏡子号

芭蕉老人

風鏡と琴と阿らぬ琴とあらす弾く爪をそらひに

柱ときき守天籟の礼とよく調へく角徵宮商乃
音におらに

踊はらゝの序

山素堂

あふひ人乃求めをきととやむまを心静からに
又人の木のむ物うこのめは方やまかすき
心乃友とやむをなくとむよりきかすいなり
隠士ありそ名と芭蕉とよふをせびいよのまに
あふの友ありし十暑市中の風月とやん三夜
いよ乃幽居を訪ふいよの林のくらあつたのぬらんと

あんとそ茶店を出ぬ去りよかきりらんとそ
あふむらうとそふ人もあやうり

何となく芝吹風をあられなり

松風

他をきらういけは秋をやをならぬ作者とま
只あふふりきふうきあらん布とまきし物あ
夕露のゆくあふいよとあらす霧むまひま
られや年とよはあぬいけは花と茶の眼より
困人の市なさんその紙林間の小車むさ
まきさらあを温公乃つばおひ出しや
あふ帰るぬかすはえあはのそくらとま

たけいひよしのたすこのよわたりもゆさりの風は
一歩百里乃おのひよとどくや蜀土川の松子ハを親く
あつて天をなくや泣子とひそをたる紋付来
いとく人の仁乃端よりたる様とさく人の一もれ
かちうて致くし今親之声のちうめこりりぬ次
さよお中山のまハ子峯の杜牧こまきるが西ひの
命あつてあつんち致古心乃ありまはを身とせりて
他といふあさうん誠や伯牙のんさう流水とあまハ
その曲なるらあさうと我の陣期り再あつとさも
弱乃心さうくとあさうは弱の心をあつとあはれと

うぬ石のむき致侍ふむう白氏となさうハ茶賣ら
妻れちらへからたや坊の妻のさぬさういふは魚一ちや
うれハおのふとり是ハ林藤乃坊地をかゆもはるさうん
貞徳や尾張のや伊勢のやねら本から一の竹麻うく
鼓うめて人乃心と舞一むそ吟とあつてを境とせらる
おちうくおとそ皆葉とかううく山うたとさうう
あはれなる狂ハ秋志人のうれと似たりそ牡丹をらさうハ
隠士乃向かうさうや風乃芭蕉家茶葉さうこやあまに
ちうし習もさうまるをたかうて茶もさう一茶も
あつハありぬるさうさうて書ぬ

玉川

出于伊丹百九所
撰之六玉川集

園女

おとこもさかるとや戸とまきねのふれたるはき新と女ら
たしては母とおめひてまると阿さける人もあはれ
ともちや家さきしふれ玉のふりさきとちからぬいんも
いうゆきせいとけみさけやあつたし山さのこのひい
ぬさ川口六玉川の水乃れとまきねとまきし免なく
まきしとくぬ乃れとまきねとあむたさしとこれとまき
ちとまきし約のくはははらとまきしとまきしとまきし
水かひてまきしとまきしとあむたさしとまきしとまきし

おとこもさかるとや戸とまきねのふれたるはき新と女ら
たしては母とおめひてまると阿さける人もあはれ
ともちや家さきしふれ玉のふりさきとちからぬいんも
いうゆきせいとけみさけやあつたし山さのこのひい
ぬさ川口六玉川の水乃れとまきねとまきし免なく
まきしとくぬ乃れとまきねとあむたさしとこれとまき
ちとまきし約のくはははらとまきしとまきしとまきし
水かひてまきしとまきしとあむたさしとまきしとまきし

山さき馬乃世世して六玉川

其川

名日や馬乃世世して六玉川 吐月
まきねの果ハ阿さけるも六玉川 葵太
玉川とまきしと六玉川ありまきねとまきし し見
や戸とまきしと六玉川ありまきねとまきし 嵐後

山吹やわらく日も水と墨とを
 山吹や舞臺とく桶も花の影
 金戸ふまやまひまを罽戸出羽一
 山吹や牛もあふ流の裾琴枝
 卯のふれやゆき乃らりぬ朝丹丘詔
 魁とふ阿やこころあまひ秋
 赤らくやう波もも麻せぬ流スシれ
 行舟の詠へるゆくりちりり船下後
 高舟日乃暮ぬとのた子色赤武水
 色尺くそ声のすくぬき流水水

山吹

奥波

振る面といふ紅紫も雲波おひひ者の響なり
 山吹のきよけりうろ色中和して七奏乃とれ
 類きくゆきまゆや子子振伊勢の裾垣は太く
 袂紫の直裾う鼓もかまうはうそ朝の價めそはく
 西方浄土の御佛とけいふあうそくましくらん
 井底の玉川もハ下紐乃めらるるあふえかへを海まハ
 青樓去限揚翡翠翠の心弁もあまのるる映と
 ちりぬる五帝の迅速も志くくけい光る花をさうせ

おろしつゝ地獄の沙汰も羨あるはまを獄卒と
志りしは鬼一口乃除和の周もかの光り春の
宮さばあせぬる言や唐さるふのる世人牡丹と
志さるゝは愛さるの二字もや唐人の顔さるゝ家も
けはのうかりしは棄て掛破る業とさるゝぬ

田子の賀 金龜

おろしつゝと魚けりとのふらふらは大なるは
おろしつゝのこしくふるゝ李のふとく一政り玉は

半ふ双角もななく泥中より出さる花かけまは
志子の名もと誇りし月下の門あまを詩客も
きりつは蛙の伝家とゆへら人も才人の名とみれ
あまの海乃ちりかひなくてややまを不乃浦に
せれおとさるも梅の楚辞もさるゝさるゝ公の
百首も入るの恨なうしんをさるゝく杏林の説も
そ功とらふ蘭陵の美酒も李白もみれ
さかみさ川の田楽ハ業卒もさるゝさるゝ生涯
乃水田中をさるゝ化しつゝ衆とちりや敬衆と
おろしつゝ高門三月のらるゝひあまやあや

佛の座

掃雲舎遊之者
吏登翁門人也

班象

梅乃花芳——月あう紀夕何れをあ——此
お不らけしあの——手折——掃雲舎乃書書
阿り七見遊吾の越——くさ江波ともく——
す也有——むら——や秋社悲——む——秋社去年の
松と——聖の霜乃清うへはよやや中そめれ
なやせうもむと日あ——日とおとをひま終温花
か——みんそめてきちまら春の夜れ足果ぬをを
破りぬほ——くは事と親まら——ひと川休林

へて木のうゑと拾ひ不そくまあま川秋と蝶々垣根の
卯美くま——くま——は事のあらゆ——と共ふて
こくれうらみてよりまびり——な川う——さなあやさ
けまてけ信——く筆とぶみ今る——あら——に
おと詠うまゆら書乃名も法をま——り阿是元
佛の座と呼——さうやひさ——辞世の一章と吟——
か——温石もくくけく春の草書——醒象
燈下こけあちさなうさおひと述る事も又まれ
夜の夢をうりも

飲酒一枚記清

ろせ伝

ところあり一承朝より後くの上戸たられ沙汰し
 中よりくさのそりも阿る守又からんとくひ茶飯
 乃ての免る酒もあら尺只くす事う極楽れ
 ためうは南堂阿派陀佛とくくくくくひなき
 性せまらうとおひむりて一振ふむり外別の
 子細ハハ尺但之秋四後の者おとくせぬハ酒宴と
 史定してめはくくくは酒者をもめくくくかりふ
 うらこのをぬくはかこ移くふくは大豊ハ二もれ

酒あろまろくくくくくは酒と免ひくくくんと免せし
 人ハたよむ一代の法は学もよも一文名智也免乃
 以てかしてト戸も常くありまきく唯一向く
 酒を乃むくく

右飲酒一枚記清ハ

右飲親王淨化のくくくくくをさる人乃許す
 由盡さくくくかけ物ありて座くかくはくくくく
 魚白淨化ちちくくくくくくくくくくくくく
 きくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

飲親王家ハ飯くく男くくくろせ伝

いこうりりき事ハ砂てありていさ戸て戸出ハ

十七日

其角丈

くせ公

新巻

吐月

天あり地あり花あり月ありさのいさ戸て戸出ハ
ちねとなくさむまら中間とひとまはは法障ありよく
人々体しりてさくく守疎からあつまるとなき
岩木の峯とほくく一頃比より水雲のよる人々杖と

はす一何らあるさるるさ差ぬハの置れ信痛もかこい
袖と志ありたりや妹う垣根のけをまわもはは師また
いさくはまらうのかくはめとくくくかひくまらうた
本の向やくまは月とさのこまのけく乃おやひくをさ
ありもあらりりりさるる守さく何とくねさるん例小
くくくむくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
きぬも又さむくくくくくくくくくくくくくくくくく
新坊とよくくくくくくくくくくくくくくくくくく
なをせあ

掛燈蓋

耳得

日月とろり火の海ハ油をそ天地の灯蓋とす
あのをれん家よとてかけ灯蓋とハ詠み
らんなるはく初之條大蛇ノ用らりて雲飛ふ
夕暮や蟬乃小川とありて水空月の浮風
朝とめくまを消あんとてけを榮枯風
まうあはるるむらぬの時宵の方かまふふ
自在ありらるる藩やき田楽とまをく垣
横敷と約糸のまをら男とほふふ又舞衝を樓の

かけの燈ハ秋の綿と輝て最後の光とて
将浮雲の莊嚴第一ハ言座の如幻の形
ありてあふ悲し人の世中灯のこころ
幸忘るへくはとる信れ垂戒とて
かゝるを乃くは秋のぬりやとてまたハ
乃く似たりとのハ掛燈蓋ありて
信するは信すすはまを燈臺下くら
あまを執り比と油灯ハなるや
夜を文行やに油燈と鼻の穴をらり
あんと秋の障扉とてあめ

其引

秋風や傾城ひとり高きありて 系式 楚水
 灯籠を眠るもあはれ小傾城 馬雲
 くらしくと叶らぬ意や五月五 桃鏡
 家奴の望しむ心衣やまじく衣 蓼太
 みうへまた我因雨やきまほつり 更流
 一粟の瓶こそくやけさ乃秋 蓼旦
 恵比寸講打目心し布子汁 嵐亭
 梅の香ハゆのそ定ひり冬 露 兆而
 名月や隈なきよりともふより 露 上弦 芦風

暁乃書や喜まはるの初しけれ スシ 杜十
 捨ふ日も折くありて壺扇うか 久能 素三

正秀三言文

芭蕉

秋あはれゆりとそ秋半定家う力の程を足とんり
 石をふつと打りしれ 炭薪はゆく ころころとせし
 陸分抄寄書宛てぬは張所を寺之らしててぬ
 一は柿かき向らり庭あめとておまへる心くらあはれ
 ころころと

成経

蘭竹香や記てさう戸と茶芝友

首小

ころひの月と扇はりそり

交考

小櫃くく彩茶二俵うち出して

源急

淡和

萬古

あふひの亡魂定ふ秋とて月の光も只うたあつと
秋情をうけく深しと波岸の鏡と解く秋海に
穢くといふとまき申やめ家とくく乃祖乃社也

ふひとと蛤の二見とと奈らけは古き名區と探り
く一登き跡乃秋ひも深く秋波の楫松も秋も追
薄きより小和もや文りやと秋末もまきと虫れも
朽まふまきとやわくまきとわひあをりり秋風の情を
おまきと山陰とまきと画景とひらくらあやとく陸中に
向ふりや一城と秋を倒して秋ま目の赤く浮ひ水車ハ
天下を双の杜観して月を汲取と翻り鶴屋の音乃
風竹もも常とくまきと牛房くらくは山陰と山陰と
所く風流の名とくまきと八幡山向くまきと暮れとく
神秀より遠流とまきと山崎とくまきとまきと遠流と

こころをたまたましむる源の多舟田(か)ふ移ハ弁月の夜こ
阿(あ)福(ふ)とちた(ち)りし牛(う)過(か)窓(ま)櫓(ろ)りもりし阿(あ)守(し)とてまるも
止(と)こあ(あ)しに退(ひ)こ舟(ふ)中(ちゆう)と願(ねが)まてと若(わか)も三(さん)も白(しろ)めと路(ぢ)路(ぢ)の
群(ぐん)あ(あ)るこ(こ)し(し)商人(しやうじん)の能(よ)衣(え)忌(よ)る阿(あ)り残(のこ)る異(い)とん
い(い)つた(た)る病(びやう)客(きやく)阿(あ)りわ(わ)た(た)ハ初(はつ)め(め)の擗(つ)の夜(よ)の伴(ばん)へりし
去(き)何(なに)め新(あらた)花(はな)の文(ぶん)か(か)う(う)流(なが)石(いし)の袖(そで)の香(か)はあ(あ)りしに(に)は津(つ)の雲(ぐも)れ
婿(むこ)の糸(いと)と(と)か(か)ら(ら)ば(ば)ま(ま)あ(あ)る(る)は(は)そ(そ)と(と)ゆ(ゆ)い(い)や(や)し(し)や(や)ぬ(ぬ)か(か)女(むすめ)乃(な)り
あ(あ)ら(ら)る(る)糸(いと)竹(たけ)の乃(な)こ(こ)と(と)よ(よ)も(も)る(る)か(か)と(と)畢(はつ)ら(ら)い(い)あ(あ)る(る)花(はな)若(わか)女(むすめ)
陰(かげ)あ(あ)り(り)体(てい)人(ひと)と(と)す(す)り(り)也(や)又(また)ハ勝(かち)と(と)て(て)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)法(はふ)師(し)う(う)こ(こ)り
は(は)佳(よ)境(きやう)と(と)候(こう)て(て)生(なま)涯(げ)一(いつ)首(う)の詠(よ)と(と)は(は)ん(ん)と(と)も(も)曉(あ)け(け)ま(ま)ふ

あ(あ)る(る)も(も)た(た)ら(ら)ぬ(ぬ)凡(ぼん)情(じやう)こ(こ)已(い)に(に)し(し)伏(ふ)見(み)たる阿(あ)波(は)橋(はし)と(と)人(ひと)と
亦(また)ば(ば)よ(よ)と(と)ば(ば)交(ま)と(と)ま(ま)と(と)か(か)ふ(ふ)大(だい)都(と)會(かい)あ(あ)り(り)と(と)勢(せい)作(さく)地(ぢ)と(と)
は(は)く(く)し(し)賀(が)易(い)の(の)に(に)た(た)く(く)遊(あそ)人(ひと)袖(そで)と(と)は(は)ら(ら)ぬ(ぬ)談(だん)と(と)碧(せき)阿(あ)の
愛(あい)化(け)目(め)た(た)ら(ら)ぬ(ぬ)と(と)て(て)め(め)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)と(と)ま(ま)ら(ら)て(て)旅(り)お(お)と(と)ま(ま)た(た)
こ(こ)も(も)ま(ま)た(た)る(る)

虫(むし)舟(ふね)乃(な)ま(ま)と(と)押(お)あ(あ)る(る)月(つき)秋(あき)う(う)れ

答(こた)千(せん)那(な)文(ぶん) 芭(ば)蕉(せう)

あ(あ)ら(ら)る(る)厚(あつ)薄(うす)の(の)人(ひと)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)由(よし)は(は)ま(ま)た(た)ら(ら)ぬ(ぬ)と(と)え(え)帰(かへ)る(る)阿(あ)

如雲後くち孫希中

一 墨白くえんくく白

辛酉の松と花をり勝おし

とウアエてうとハ

山波来て何やうゆーすたん

そ介又三白ととてもきる幸やハヤハ

一 此秋は秋の阿くくひむけたるを眼とあらふとんれ

ひとひとくくつたててもあかしくくは備と好幸一あて

好一からすくくきるは程とらたてくはくひんむか

一 之角へう状するは州ては花雪代出くみくもそ友

きく報く何やうくやういさくは返り友へくはた括つりり

自遠をくたれくき報けのくむか

一 淡若く後他及らる周くおんく内はひんくそく

五月十日

千那老人僧

芭蕉居士

姐板

信支

姐板ありそやうち札を似て高脚とくくおせる服物も
なぐまきゝ家家に用ひ二人形の類ひもかーはあう

陶家此年迄の琴々使々々々々々々々二助三助も
ゆへいたるさききてはあさむ花きき月のみしりきと
あつめりけ初交の左太ありて七絶乃拍子の産けり
ちりハ此風古風乃強らんちりりくさえや天王寺の
樂もいす一と失りぬちり一魚好法仲とゆはし一ゆと
水るさるさるん冬の日れをのすさ記し隣いさしゆゆや
あらん冬の中ちりくハかまひきくも又家一祖初も
洛の穂麻之御豆切書志りまんとも真さりりり
翔平目ささくと水あさるたるハ時めくん比さるゆ
まじ豆腐松原のまけめるハ花冬花やとそんははく

こ風情のおりりくふうさし初秋風此書伝は故書これ
鞠の立一たは飛渡のうへもあらんささうく只羨一
かめぬものハ料理人なるる一むのみ守人乃き先こ
子を旁一あろ飯用の中子も村学究の教子子まハ
庵下飯こささくあうりかとを師一教ありもいや
たし一世と龍と展る越板ハ何まとそ展る龍のおたさ
莊周の信りの行さす一と鶴とささくと牛此刀を用ぬを
魯文子の天なる不自をあらんあさひの辨もさし

七絶もこりちりさき青と房り妻

美

三

三十一

木かくま

或人委置於別莊
故題曰木隠

鐘山

玉田よき跡くさるの屋と中林一さよかあらは遠ありて
青たふるすくるものまればあやこくをくとさゆのは
かの確の鳴林ましく今やう下はゆよそくをす桶風呂と乾
ひよものよあまこくよまをまひくまひの價も昔の紫ふる
世こくまこくまひをたまひくまひをみまひまひまひ
寸行者の垢敷くまひよまおまひるく南を南ま
等師とまひまひ此世あまひまひまひまひまひまひ
事こくま小和もや陸水りて山景まひまひまひまひ

いてうまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ

木かくまの方たくありすまひ

其引

象房はまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
水まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
おまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
扇歌

三十二

三十二

ごとくおれらげを踏ぐり所たき
 水もしくそのし勃りぬ柳うれ丹在覧
 采の戸や箱こゆつりてぬく光る備中六雅
 大どしと寐てあやへしををい人右
 苗ちつくふ言乃さこえて紙衣代雷雲
 彩坊こ見せて並ありくまを喰遠平
 阿の河ハ義の袖をを所たきぶ如雷
 うらうる河や波子の下りみら春ひら
 三支婦の中くくひとを身衣代松陵
 久仙や善益忌とく人ひとり白風

阿の河くくくい波やぬく光る 葵太
 梅ぬもむユもやうー言をけ 婆心子

秋仙

静はやそのきて眠るまれ心 周竹
 細代善ゆくさくちその月 耳持
 後くほきくくぬ日ハ秋あつて 葵太
 袴といへん 袴ををえり 竹
 散雲葉掃く城下此這入口 得
 あくひきの声と隠とも 太

ウ

寐り居る和伽の伯母とめたるり
 白子忠味暗試を二裾ふ
 世の中にまゝくさちの揚を
 かゝ小刺のまゝをちり
 一乃乃傘の三人濡り
 粟も拓くは力さるる垣
 かゝ割の月の浮名も木日色
 舞ういやされ番の小鯛
 おとくと乞法乃辞義のあらう白
 豎の祓紫を口もまゝく

竹 太 得 竹 太 得 竹 太 得 竹 太 得 竹 太 得

+

こまれてはまゝの初夜の涙かゝる
 花御きとり此子里くひる
 嘗てはれめうさるく斤折戸
 法進くちる候と忌徳てゑする
 嘆氣うゝ垂りむすふのうりま祓
 卯乃売の風とまゝく祓
 ちらくと陸此素くさる夜八時
 百姓なりくちとありを撃
 一休も大舎の茶と飯をわくま
 近る矢走り舟も傘

得 花 雷 嵐 柩 眞 白 如 後 堂

さぶらやと響と鳥のみとつら
 なりきて志ちふ併状何處
 虫抜く行くとく袖の月
 根^ク結きよとて蟬乃ちく
 赤い海や幸もあふんからす瓜
 汁い合兵の本曾臨子くも
 い川まきも母と子依のいーらひ
 夕日にちつす巖ほくく
 ちのく乃所を花乃接穂屋
 高解の川もあふん流るる川
 雷 牛 波 流 坂 堂 牛 雷 流 波

其引

けくまや香くたふその象んく
 漕人乃あまえくもゆけ香も舟^{イセ} 麦浪
 竹折るく香もあはゆくすめうの^{イセ} 蓼把
 笠筒はけくその英ー香も露 吐月
 香も日や拾ひ出さるく明からす 機石
 兼親くむとり漕多り香の友 蓼太
 ろの香や梅乃あはひと片^{スシ}ひと 兀子
 うきゆれらるるき前きくせ海嵐くれ 耳得
 香も梅や旭夕日一亭^{イセ} 嵐亭

屏風くま凄く書くりゆ佛名 白牛
骨ありて杖あり色なき細代ち 耳埴
嘆乃早も悟くはありるを 盈行

ういじ巻

雷堂

錦繡の目紙よみこしめ飯のありひこちくろ
そととんききりはあぢり人かろく葉一束の記れ
念をきこすはく今の世は菰かろく入るきと
造らまゝ 何れを麻へまてり 紙をまへ

そはそれの中庸を遊ひていとうとあやしく師志
紙夜の切とこうちてむし乃志あんとはくろるを
吹礼乃笈摺こひきく 紙段のてくきり紙きり
い紙ていかりはあてはまてひて春もや桜ちる紙版
この縁端こうちるひきく紙麻の文紙とてわける
紙衣はよきかゝそのそ花一章

偶作

耳埴

世々好物の二字ありきり書物店には八百巻れ

Handwritten mark

Handwritten mark

夕暮をかきし細屋の隈に朝顔の及こさき交を
きり交し我友雷堂只のくまは茶漬と淋して
漂く然ちせ之とせの子業といふ報費は乃
一といさらくとかき出さる月はいさらく花あは
しらくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
一物もなき隠士あり雷堂といふ事あり人ぞれ
予う茶漬と迫り川えの名と立てて此のまはし
あつたさきは美味ありんきみいりくまと旁
くくろあはりながらす家ハ人乃たたふるまかぬり
あらぬえと乃はくくくまきふいふはむむむむむむ

一碗の茶とハなる目れまがるを例乃大茶漬此
二遍流しとさくらくともの一さる言乃今うと
耳屋こ乃くまはり

茶漬とハ控みくま世と急ひす講

松乃阿ら古茄子集
之序也 葵 太

今茲雨子の年六月廿五日我師更登翁の一月に
いふて像前之時菓の奠とさく（紅派工を深く
議く考す盡ふ若嗚呼不佞葵太恙を一時不孝

うして菊と菊よりあつらん故室の梅を首飾うこれ
花芳しきれと朝ハやしく乃秋風ニ荒多終ニ
世と異際の福もとむりひちらぬりハかのい海の中に
位んうハとよみらん人乃こころあふん〜う〜正考中も
俳諧のねるとぬく隠迹のおもひ出さすされと浮世れ
媚と端邊へ〜いま〜向上乃一途をたたらさる〜
一日蟻考たんと彩古の境を諦するこ及く深川
け師あはるみ減まりぬ予南人の指車を擲るつ比して
やよひの之日とらに小舟ととめて履とこころ故人
家在秘花岸とはくまる日乃よと不ひあふ〜
臥く

家門とたけハ二史書居こまうをりくと茲とまうけ
寛政や〜終て夏ニ師才の恩とあらす杉蔭蒨青晩号
葉又平舎吟号象号落合て題と探る吾う俳と試あふ
ちり〜是ろ作世の始をける今やと侍不さる〜
懐旧ニ勝とらまる是るり月島花内ち〜と福を
月にさ〜て正芥とあふ物思ひあまりて奥の細心の
記さ〜らゆり〜眼P入内師と免く曰〜山や春
海〜して秋よを末の初結い〜便か〜ん迎さゆ〜り
足か〜免をよ〜み〜〜野々里やさ乃心の房れ朝む
か〜とみきて竹ふけ秋ハ玉川の月〜ちけとさ雄れ

江戸をたゞりて入る。十月の六日夕月夜をきりし
 先萩門の月よりかろくぬろくわたりきる師多紙
 死て汝り夕月七日此みよ萩月初の帰路を告りりれ
 途中ありては愛と逢ぬる。と皆なけり阿(り)し
 かしこくおりてあせりといふ。こる月とたれん
 涙をらかりきりきわゆると涙をせぬまりハとせり
 不とは涙よりよきより一跡よりて若春秋と二十路まり
 指を屈す阿く師と古稀の齡と跡となりてかれ
 蒼々たる髪ハ化しと白く動揺する齒ハけり
 ゆくはあそきむ(り)白刃の痛ありといふ。こる

中さけりうけき社中のあらま。君と附屬一因西の
 一向と南無真人の凡成志とひ蓮のつらられり
 されて暮た去年の妻ハ後河路やと橋の首と志こふ
 らこの招はいく卯月皋月の院ハと玉とをくふと
 葛也今号周竹々みと師のつらりさびおとあつさし
 心なきこの旅とさなす。吾と友枝の記より異濕の
 つらりて水を月の初草庭とまゆひ入わさは
 らうく。と泣ふるゆり。とみ共講とをくせや
 心む乃と悔さか。とぬ日敷と決をせ。とせ
 其時と日とおのふ人としる事あり言ハはさす。

東都雪中菴門人

雪堂白牛

校合

風齋雷堂



尺倉屋喜兵衛

雪門俳書目録

芭蕉翁句解 蓼太述 曉花遺稿 吏流

白滝百韻 機石集 前編花三解 如雷夜光

鬚篋宗祇正五集 蓼太解 續其袋古嵐雪文集 蓼太撰

俳諧唐詩三物 雪門中 幸崎三吟 柳波湖涼

蜀川夜話素坐宗七居但并古人句拾 葛木撰 名乃宿 眠江

墨繪合六玉川哥仙 如雷赤羽左衛門 南覆牛夜光 僧都問答 雷堂

魚と水古今婦女句拾 野菊撰 躑躅行脚 山坂集

飛夜二部并並見賦
都雁撰

新古今のりり
桃鏡撰

史登建稿
芭蕉翁七部搜
莫多撰

花簞笥正花論
白牛撰

芭蕉翁句評入
去來湖東問答
桃鏡撰

五杰一具
周竹撰

百ぬく後陽
馬老撰

按乃後陽
元更撰

續之白のりり夏川集後陽
元子撰

老耳集翁門人寓居吟
桃舟撰

新古今
芙蓉文集後陽
耳得撰

恋乙見
莫多撰

芭蕉翁文集
桃鏡

俳諧無門翁門人寓居吟
莫多撰

芭蕉翁附合集
桃鏡

月下録花多菴極勅先生函云
後在名居撰

百五十番句合
吐莫多月

芭蕉翁翁仙春日と秋
桃鏡

芭蕉翁文且至圖
桃鏡

ち六花名の乙見休

後編花三斛
如雷

糸山彦六花菴選

凡羅画行
蓼且

虫勸進六花菴門人
蛙吾撰

俳諧古人飛句附合棚さか
胤萬古暖

ひ後河女も乙見か乙見こ乙見
花夕集

景名所句拾と我
蓼太

芭蕉翁真跡集
蓼太

附合百番句合莫多評
杜中

芭蕉翁俳塚
同

た墨水ふ紀行ろ舟
如風

養老八詠集後河
麻介

かまふ男

遠州 芦毫

更級紀行

盤古

俳諧通夜物語

菜路

弟鞋依書

因竹

卷中秀逸

雪のほろ

桃鏡

俳諧親仁

斑象

續喜れつむ

今

金平双男

四之女

公箱
具角
出雪 三吟未來記

周作
盤古
吐月信ま

三編宮の鏡

桃鏡

多系心新盆

盤古

